

## 非行傾向のある子どもの心性における今と昔 ～文章完成法テストを用いた比較～

中山 哲哉

### The Difference between Now and the Past in the Psychological Characteristics of Children with a Tendency to Delinquency ～Comparison using the Sentence Completion Test～

Tetsuya NAKAYAMA

#### Abstract

The aim of this study is to clarify transformation over time about the psychological characteristics of children with a tendency to delinquency. As an investigation object, I chose the next three groups of children with a tendency to delinquency. The first group is made up of 55 children who replied to the Sentence Completion Test at a Child Guidance Center from 2003・2004. The second group is made up of 69 children who replied to the Sentence Completion Test at a Child Guidance Center from 1994 to 1996. The third group is made up of 123 children who replied to the Sentence Completion Test at a Child Guidance Center from 1984-1986. I analyzed differences in the replies to the Sentence Completion Test in each group. The main characteristic in current children with a tendency to delinquency was as follows: The percentage of children recognizing their mother affirmatively holds two-thirds. The percentage of children recognizing their teachers affirmatively exceeds the percentage of children recognizing teachers negatively. Percentages of children hoping for a concrete occupation in their future decrease. Thus, it was indicated that present children are having difficulty with development tasks.

**Key words** : children with a tendency to delinquency, a psychological characteristic, transformation over time, Sentence Completion Test

キーワード：非行傾向のある子ども、心性、時代による変容、文章完成法テスト

#### 1 問題

##### (1) 子どもによる非行の動向

平成18年6、7月、岡山県A市の中学・高校生

を含む少年グループがJR線路への置き石や自動販売機の窃盗などで摘発された。この事件は、服装の色をそろえる“カラーギャング”を名乗って犯罪が

繰り返され、被害総額はわずか1か月で約680万円にも上がる<sup>1)</sup>。グループの少年たちは、“面白半分やった”、“メールで自慢し合っていた”と供述したというが、背景に、今の子どもたちの社会規範の内面化が行われにくく、パーソナリティ形成の未成熟な姿が浮かんでくる。

さて、子どもによる非行は、戦後第三のピークを記録した昭和58年（前2回のピークは昭和26年、39年）以降減少傾向にあったが、平成8年には前年を上回り、近年は第四のピークを形づくるほどの伸びを呈している<sup>2)</sup>。法務省の研究機関である法務総合研究所は、平成17年版犯罪白書<sup>3)</sup>において、少年非行の動向を次のように分析している。触法少年<sup>註1</sup>を含む少年刑法犯検挙（補導）人員は、少年人口が減少しているにもかかわらず、ここ数年おおむね20万人前後で推移しており、平成16年は、19万3,076人と3年ぶりに20万人を下回ったものの、刑法犯全検挙人員の約15%を占めている。また、10歳以上20歳未満の少年人口10万人当たりの少年刑法犯検挙（補導）人員の比率は、近年上昇傾向にあり、平成16年は1,505.9と前年より低下したものの、なお戦後第三のピークに次ぐ高水準にあって、成人人口10万人当たりの成人刑法犯検挙人員の比率の約1.4倍となっている。さらに、少年の強盗検挙（補導）人員は、平成8年以降、年間1,000人を超える高い水準で推移してきており、特異な凶悪犯罪も発生するなど、少年非行の動向は、なお予断を許さない状況にあるといえる。

## (2) 非行傾向のある子どもの理解

中山と武井は、今から10年ほど前、子どもの非行が第四のピークにさしかかったころ、児童相談の臨床において、非行傾向のある子どもと不登校を訴える子どもの状態像が変化してきつつあることを感知し、当時とその10年昔との時代間及び主訴別差を文章完成法テストを用いて検証している。その結果、

①家庭に対する認知は、相対的に非行傾向のある子ども群のほうが当時においても10年昔においても肯定的にとらえており、不登校を訴える子ども群は10年昔よりも当時のほうが否定的にとらえる傾向を強めている。②友人に対する認知は、非行傾向のある子ども群が不登校を訴える子ども群よりも肯定的にとらえ、10年昔から当時にかけて開きを大きくしている。逆に、教師に対する認知は、両群における肯定視と否定視に反対の交差が認められる、③指向的側面として、将来の具体的希望を抱いている割合は、当時も10年昔も非行傾向のある子ども群のほうが多いが、漠然としているのは、不登校を訴える子ども群が当時より10年昔で、非行傾向のある子どもが10年昔より当時で多く、この関係も逆転がみられる、などの知見を得ている<sup>4),5),6)</sup>。

一方、最近における非行少年の特徴として、内閣府編集の平成13年版青少年白書<sup>7)</sup>によれば、とりわけ、万引きなどの初発型非行や非行グループへの加入など日常的に目立つ前兆を示さない、いわゆる、一見おとなしく目立たない「普通の子」が内面に不満やストレス等を抱え、なんらかの要因によってそれが爆発して起こる「いきなり型」の非行といったものが新たに生じてきており、従来のものとは異なるパターンを示している。したがって、こういった変化をみせる今の子どもの非行は、福島<sup>8)</sup>の指摘するように、子どもたちのパーソナリティ形成が変容をきたした結果であって、その理解には新しい視点なり理論なりが必要であると考えられる。

## (3) 本研究の目的

そこで、本研究では、非行傾向のある子どもの心性は、今と昔（10年前及び20年前）の時代変化のなかで、どのような資質がどのように変容してきているのかを明らかにしたい。具体的には、非行傾向のある子どもとして触法児童を取り上げ、今と10年前及び20年前の心理検査結果から、その心性について

の時代による変容を検討する。

## 2 方法

### (1) 調査方法

非行傾向のある子ども（触法児童）の心性について、児童相談所で実施された文章完成法テスト⇒精研式<sup>1</sup>を用いて抽出する。

### (2) 調査対象

◇今< I 群とする >：平成15、16年度に岡山県 B 児童相談所へ来談した文章完成法テスト結果が使用可能な触法中学生<sup>注2</sup>→55名

◇10年前< II 群とする >：平成6年から平成8年までに岡山県 C 児童相談所へ来談した文章完成法テスト結果が使用可能な触法中学生<sup>注3</sup>→69名

◇20年前< III 群とする >：昭和59年から昭和61年までに岡山県 C 児童相談所へ来談した文章完成法テスト結果が使用可能な触法中学生<sup>注4</sup>→123名

### (3) 分析方法

子どものパーソナリティの決定要因のうち、家庭的要因、社会的要因、指向的側面の3側面を取り上げ、文章完成法テストのその側面が投影されやすい（出現率80%以上の）刺激文<sup>9)</sup>のなかから8文を選定した。すなわち、家庭的要因は“お父さん”、“家の人”、“お母さん”、“友だちの家庭にくらべて私の家庭は”であり、社会的要因は“友だち”と“先

生は”であって、指向的側面は“私になりたいのは”、“大きくなったら私は”である。そして、各刺激文の回答は、佐野・楨田・山本の類別したカテゴリ<sup>10)</sup>に基づいて評価し、各群間における回答の違いについて $\chi^2$ 検定及び多重検定を行った。それぞれの刺激文におけるカテゴリと評価結果及び検定結果は、表1～8のとおりである。

## 3 結果

### (1) 家庭的要因

父親への認知は、表1のとおり、III群からII群へ、II群からI群へと肯定的記述の割合が増加しているように見えるが、度数の偏りは統計的に有意ではなかった。これに対し、母親への認知では、表3のとおり、I群において、III群からII群へ減少していた肯定的記述の割合が増加し、逆の関係にあった否定的記述の割合は減少し、また、III群、II群で変化のなかった客観的記述の割合は減少しており、度数の偏りは統計的に有意な傾向がみられた ( $p < .10$ )。すなわち、I群は肯定的記述がII群の約1.7倍増加し、否定的記述及び客観的記述ともII群の半分近くに減少している ( $p < .025$ ,  $p < .025$ )。この父親と母親両者の違いは、平成11年に実施された総務庁（現内閣府）の「低年齢少年の価値観等に関する調査」<sup>11)</sup>で、中学生の子どものうち、父親との会話は“ある”が82.9%、母親との会話は“ある”が96.3%となっている結果に符合するものであろう。なお、家族への認知と家庭の認知は、それぞ

表1 家庭的要因：お父さん

( ) は%を示す

	＋の内容	－の内容	客観的	その他	重複	無答
I 群 n=55	22 (40.0)	12 (21.8)	9 (16.4)	7 (12.7)	2 (3.6)	3 (5.5)
II 群 n=69	23 (33.3)	13 (18.8)	8 (11.6)	11 (16.0)	6 (8.7)	8 (11.6)
III 群 n=123	31 (25.2)	27 (21.9)	22 (17.9)	23 (18.7)	13 (10.6)	7 (5.7)

$\chi^2=9.44$  (df=10) n.s

れ表2及び表4のとおり、各群における度数の偏りは統計的に有意でなかった。

(2) 社会的要因

友人への認知は、表5のとおり、各群とも肯定的記述が半分強を占め、統計的に有意な度数の偏りは認められなかった。しかし、教師への認知は、表6のとおり、各群における肯定的記述、否定的記述や客観的記述の度数の偏りは統計的に有意であった ( $p < .05$ )。つまり、肯定的記述と否定的記述が、Ⅲ群ではどちらも約37%の同率であったが、Ⅱ群で

は否定的記述が52.2%となって肯定的記述15.9%の3倍を超え、今度は、Ⅰ群で肯定的記述が43.6%、否定的記述は38.1%と逆転がみられる ( $p < .01$ )。さらに、Ⅰ群は客観的記述がⅡ群の15.9%から半減している ( $p < .01$ )。この教師に対する肯定的内容が増加し、否定的内容が減少していることも、「低年齢少年の価値観等に関する調査」に照らすと、“先生は自分達の話をよく聞いてくれる”の項目に“あてはまる”と回答した中学生は合わせて73.8%<sup>12)</sup>という結果の反映かもしれない。

表2 家庭的要因：家の人は ( ) は%を示す

	＋の内容	－の内容	客観的	その他	無 答
Ⅰ 群 n=55	29 (52.7)	10 (18.2)	4 (7.3)	6 (10.9)	6 (10.9)
Ⅱ 群 n=69	25 (36.3)	12 (17.4)	7 (10.1)	18 (26.1)	7 (10.1)
Ⅲ 群 n=123	62 (50.4)	25 (20.3)	12 (9.8)	12 (9.8)	12 (9.8)

$\chi^2 = 11.58$  (df = 8) n.s

表3 家庭的要因：お母さん ( ) は%を示す

	＋の内容	－の内容	客観的	その他	重 複	無 答
Ⅰ 群 n=55	36 (65.5)	6 (10.9)	8 (14.5)	1 (1.8)	1 (1.8)	3 (5.5)
Ⅱ 群 n=69	27 (39.1)	14 (20.3)	18 (26.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (14.5)
Ⅲ 群 n=123	65 (52.9)	18 (14.6)	33 (26.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (5.7)

$\chi^2 = 12.28$  (df = 6)  $p < .10$   
 Ⅰ群—Ⅱ群：「＋の内容」vs「－の内容」  $p < .025$   
 Ⅰ群—Ⅱ群：「＋の内容」vs「客観的」  $p < .025$

表4 家庭的要因：友だちの家庭にくらべて私の家庭は ( ) は%を示す

	精神的＋の内容	精神的－の内容	±不明	物質的	その他	無 答
Ⅰ 群 n=55	22 (40.0)	11 (20.0)	12 (21.8)	5 (9.1)	0 (0.0)	5 (9.1)
Ⅱ 群 n=69	19 (27.5)	18 (26.1)	21 (30.4)	6 (8.7)	0 (0.0)	5 (7.3)
Ⅲ 群 n=123	44 (35.8)	32 (26.0)	27 (21.9)	13 (10.6)	5 (4.1)	2 (1.6)

$\chi^2 = 3.58$  (df = 6) n.s

(3) 指向的側面

指向的側面として、表7の「私になりたいのは」は、Ⅲ群、Ⅱ群、Ⅰ群の順に、具体的職業の記述と精神的向上の記述の割合の差が縮小しているなど、度数の偏りは統計的に有意であった ( $p < .01$ )。そして、目立って、Ⅰ群においてⅢ群からⅡ群を経て精神的向上の記述が激増 (8.1%→11.6%→29.1%) しており、Ⅰ群とⅢ群間に統計的に有意な度数の偏りが認められた ( $p < .005$ )。次に、表8の「大きくなったら私は」は、Ⅰ群における抽象的・精神的

な内容の記述が38.1%とⅡ群の18.8%、Ⅲ群の19.5%を倍増するとともに、Ⅲ群→Ⅱ群→Ⅰ群へと具体的な志望職業の記述がそれぞれ53.7%、46.4%、40.0%と漸減して、統計的に有意な度数の偏りが認められた ( $p < .05$ )。殊に、その偏りはⅠ群とⅢ群間で統計的に有意であった ( $p < .02$ )。これらの結果も、同じく「低年齢少年の価値観等に関する調査」と鑑みて、“人の気持ちが分かる人間になりたい”や“人の役に立つ人間になりたい”という項目に対し、“そう思う”と回答した中学生がそ

表5 社会的要因：友だち

( ) は%を示す

	＋の内容	－の内容	いる・いない	その他	重複	無答
Ⅰ群 n=55	32 (58.2)	3 (5.5)	12 (21.8)	6 (10.9)	0 (0.0)	2 (3.6)
Ⅱ群 n=69	37 (53.6)	1 (1.5)	15 (21.7)	9 (13.1)	0 (0.0)	7 (10.1)
Ⅲ群 n=123	62 (50.4)	3 (2.5)	31 (25.2)	15 (12.2)	2 (1.6)	10 (8.1)

$\chi^2=1.04$  (df= 4) n.s

表6 社会的要因：先生は

( ) は%を示す

	＋の内容	－の内容	客観的	その他	重複	無答
Ⅰ群 n=55	24 (43.6)	21 (38.1)	4 (7.3)	3 (5.5)	0 (0.0)	3 (5.5)
Ⅱ群 n=69	11 (15.9)	36 (52.2)	11 (15.9)	0 (0.0)	1 (1.5)	10 (14.5)
Ⅲ群 n=123	45 (36.6)	46 (37.4)	22 (17.9)	2 (1.6)	1 (0.8)	7 (5.7)

$\chi^2=16.35$  (df= 6)  $p < .05$

Ⅰ群—Ⅱ群、Ⅱ群—Ⅲ群：「＋の内容」vs「－の内容」  $p < .01$

Ⅰ群—Ⅱ群：「＋の内容」vs「客観的」  $p < .01$

表7 指向的側面：私になりたいのは

( ) は%を示す

	職業	精神的向上	能力的なもの	(決めて)ない	その他	重複	無答
Ⅰ群 n=55	24 (43.6)	16 (29.1)	0 (0.0)	4 (7.3)	4 (7.3)	0 (0.0)	7 (12.7)
Ⅱ群 n=69	27 (39.1)	8 (11.6)	0 (0.0)	13 (18.8)	6 (8.7)	1 (1.5)	14 (20.3)
Ⅲ群 n=123	60 (48.8)	10 (8.1)	3 (2.4)	25 (20.3)	11 (9.0)	0 (0.0)	14 (11.4)

$\chi^2=20.43$  (df= 8)  $p < .01$

Ⅰ群—Ⅲ群：「職業」vs「精神的向上」  $p < .005$

Ⅰ群—Ⅲ群：「精神的向上」vs「(決めて)ない」  $p < .001$

表8 指向的側面：大きくなったら私は

( ) は%を示す

	職 業	抽象的・精神的	わからない	物質的希望	その他	無 答
I 群 n=55	22 (40.0)	21 (38.1)	1 (1.8)	4 (7.3)	3 (5.5)	4 (7.3)
II 群 n=69	32 (46.4)	13 (18.8)	7 (10.2)	2 (2.9)	6 (8.7)	9 (13.0)
III 群 n=123	66 (53.7)	24 (19.5)	8 (6.5)	14 (11.4)	3 (2.4)	8 (6.5)

 $\chi^2=9.93$  (df=4)  $p<.05$ I群—III群：「職業」vs「抽象的・精神的」  $p<.02$ 

れぞれ93.4%、90.5%<sup>13)</sup>であったことに繋がるものと思われる。

#### 4 考 察

結果の分析から明白なように、非行傾向のある子ども（触法児童）の心性は、今と10年前及び20年前の時代変化につれて変容していることが確認された。すなわち、今の子ども（触法児童）の状態像として、20年前、10年前いずれの子ども（触法児童）よりも、①家庭生活にあっては、なかならず、母親に対して肯定的にとらえる割合が2/3を占め、増大している傾向にある、②学校生活では、教師を肯定的にとらえる割合が増加し、否定的にとらえる割合を凌駕してきている、③将来の願望は、具体的職業を志望する割合が減少し、精神的向上を指向する割合が増加してきている、ことが明らかになった。これらの事実は、4～5年の年代のズレを考慮しなければならないが、先に述べたように、「低年齢少年の価値観等に関する調査」結果とほぼ合致するものと考えられる。つまり、今では、非行傾向のある子ども（触法児童）と一般の子どもとの区切りが曖昧になってきている<sup>14)</sup>証左といえよう。

次に、ここで、上述した今の非行傾向のある子ども（触法児童）の心性について、一つひとつ吟味を加えてみたい。第一には、母親に対する肯定的な見方が増大している傾向から、近年の親子関係の変化として、思春期における子どもたちのいわゆる反抗

が潜まり、心理的離乳の具現がややもすると遅延しがちである状況がみてとれる。いわば、「親子の世代境界をあいまいにしている」<sup>15)</sup>現象の普遍化とも考えられる。二つ目に、教師に対して、肯定的な見方が否定的な見方を上回ってきたことは、思春期の反抗が顕わでなくなった延長線上の現象であって、かつての“斜に構えた子ども”に替わり、今や“おとなしい普通の子ども”が増加していることを裏付けるものではなかろうか。三つ目に、将来に対して、具体的職業の志望が減少し、精神的向上の指向が増加している結果は、その根底に、「具体的に目に見える形で職業が画定しにくく、目指すべき進路が生き生きと描きにくいという職業的役割獲得の困難性がある」<sup>16)</sup>ことを意味するものと思われる。

以上のとおり、非行傾向のある今の子ども（触法児童）の心性は、20年前、10年前に比べ大きく変容していたが、実は、そういう実体が独自に存在するのでなく、今の一般の子どもたちにおける心性の真像と推察された。そして、今を生きる子どもたちは、中学生に限ってみるならば、発達課題（E.H.エリクソン、R.J.ハヴィガースト）の克服・達成が遅延気味であることがうかがわれた。それゆえに、今を生きる子どもたちの発達・自立の促進に向けて、この今、最も緊急かつ重要な支援は何なのか、また、その方策は何なのかをしっかりと見極め、家庭、学校や地域（社会）を挙げて実践躬行をしていかなければならないと考える。

## 注

- 注1：少年法では、14歳に満たないで刑罰法令に触れる行為をした少年を触法少年というが、このうち、児童福祉法に基づいて児童相談所に通告された児童を触法児童とよぶ。
- 注2：平成15年度分…筆者のゼミ平成16年度卒業生・日下部智子さんの卒業論文のデータ（個人情報に厳重保護のうえ、岡山県B児童相談所から文章完成法テストの回答内容のみご提供いただいた）より引用する。  
平成16年度分…今回新たに、個人情報に厳重保護のうえ、同児童相談所から文章完成法テストの回答内容のみご提供いただいた。
- 注3：中山哲哉 主任研究者（1997） 時代ニーズに即応する児童相談所のあり方を考える—心理検査からみる思春期心理特性の時代間及び主訴別差に関する研究— 岡山県保健福祉部 平成8年度 保健福祉施策調査研究事業報告書：28～32のデータより引用する。
- 注4：同上

## 引用文献

- 1) 山陽新聞 日刊：2006.7.31、2006.8.15
- 2) 柏女霊峰 著（2006）現代児童福祉論 第7版 誠信書房 東京：32
- 3) 法務省総合研究所 編（2005）平成17年版 犯罪白書—少年非行— 独立行政法人 国立印刷局 東京：185
- 4) 中山哲哉 主任研究者（1997）時代ニーズに即応する児童相談所のあり方を考える—心理検査からみる思春期心理特性の時代間及び主訴別差に関する研究— 岡山県保健福祉部 「平成8年度 保健福祉施策調査研究事業報告書」：28—32、30
- 5) 武井祐子、中山哲哉（1997）心理検査における不登校児と非行児の比較(2) 岡山心理学会第45回発表論文集 岡山理科大学：27—28
- 6) 武井祐子、中山哲哉（1998）心理検査における不登校児と非行児の比較(4) 岡山心理学会第46回発表論文集 ノートルダム清心女子大学：5—6
- 7) 内閣府 編（2001）平成13年版 青少年白書 21世紀を迎えての青少年健全育成の新たな取組 財務省印刷局 東京：41
- 8) 福島 章 著（2003）非行心理学入門 第16版 中公新書 東京：ii、202
- 9) 佐野勝男、榎田 仁、山本裕美 共著（1994）精研式 文章完成法テスト解説—小・中学生用— 第19版 金子書房 東京：105—108
- 10) 上掲9)：67—100
- 11) 総務庁 青少年対策本部（2000）低年齢少年の価値観等に関する調査の概要 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付 青少年調査担当 [<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei/teinenrei.htm>]
- 12) 上掲11)
- 13) 前掲7)：28—29
- 14) 碓井真史（2004）なぜ「少年」は犯罪に走ったのか 3版 KKベストセラーズ 東京：225
- 15) 前掲2)：34—35
- 16) 伊藤裕子（2002）第13章 現代青年の特徴 落合良行、伊藤裕子、齊藤誠一 著 「ベーシック現代心理学4 青年の心理学」 改訂版 有斐閣 東京：209—226、223

